

ゼカリヤ 11:1~17の預言 二人の羊飼

1. はじめに

(1) 預言者ゼカリヤ

- ① バビロン捕囚から帰還した時期の預言者
- ② レビ族の祭司

(2) 「約束の地」の支配者

- ① ダニエル書の預言「4つの世界帝国」
 - バビロニア→ペルシヤ→ギリシヤ→第四の国
- ② 世界帝国=世界的視野をもった組織的な覇権国家（覇権主義または帝国主義の国）
 - 山本七平「ユダヤ戦記と日本人の宿題」 世界的視野をもつ組織的大帝国
- ③ ゼカリヤの時代には、バビロニア帝国から、ペルシヤ帝国に移っている
- ④ 次は、ギリシヤ帝国、そして第四の帝国（ローマ帝国とそれ以降の国際社会）へと移っていく

(3) 前回は、ゼカリヤ 9:1~8

- ① 外国の王によるツロヤガザへの侵攻の預言
- ② エルサレムは攻撃されない
- ③ この王は、ギリシヤのアレキサンドロス
- ④ ゼカリヤから約200年後、紀元前330年頃のアレキサンドロスの東征によって、預言は成就された

(4) 今回から2回にわたって、ゼカリヤ 11:1~17

- ① メシア初臨とそれに伴って起きる出来事に関する預言
- ② ローマ帝国の時代に成就
- ③ 今回は1節~11節、次回は12節~17節

2. アウトライン：ゼカリヤ 11章の預言は、大きく3つに区分できる。この中で、真の羊飼いと偽の羊飼いが登場するので、「二人の羊飼いの預言」と呼ばれる

(1) 1~3節 国土の荒廃に関する預言

- ① イスラエル全土が北から南まで荒廃するという預言
- ② 紀元70年と135年の2度にわたるローマとの戦役で現実になる

(2) 4~14節 真の羊飼いが拒否されることの預言

- ① メシアの初臨に関する預言。メシアは「真の羊飼い」として描かれる
- ② イスラエルの指導者たちが「真の羊飼い」を拒否する。このことが、第1次戦役でのエルサレム陥落（紀元70年）へとつながる

(3) 15～17節 偽の羊飼いが現れることの預言

- ① 神が、「愚かな牧者」(15節)、「能なしの牧者」(17節)をこの地に起こす
- ② 彼はメシアが公生涯で実行したこととは全く逆のことをする
 - 迷い出たものを尋ねない
 - 散らされたものを捜さない
 - 傷ついたものをいやさない
 - 飢えているものに食べ物を与えない
- ③ 彼は偽の羊飼、偽のメシアである。
- ④ 第2次戦役は、ユダヤ側ではメシア運動に発展。反乱軍の指導者バル・コクバを、ユダヤ教指導者がメシアと認定した。
- ⑤ このことが、紀元135年の国土喪失・世界離散へとつながる

国土の荒廃に関する預言 11:1～3

1. 1～3節で描写されているような国土の荒廃は、歴史上、ユダヤがローマに対して起こした第一次反乱の結果、まず紀元70年にもたらされた。続いて、第二次反乱によって、紀元135年、国の全土が完全に焦土とされた。
2. 杉 11:1～2
 - (1) 1～2節には、「杉」。エルサレムにあった神殿(ソロモンの神殿、または第一神殿)は、別名を「杉の家」(I列王記5:5～6)
 - (2) ゼカリヤが預言していた時期は、バビロン捕囚から帰ってきて、エルサレムに神殿を再建しているとき。その第二神殿が将来、破壊されることを暗示
3. 羊飼いたち 11:3
 - (1) 3節には複数形で「羊飼いたち」が登場
 - (2) 彼らは、イスラエルの指導者たち
 - (3) 「彼らのみごとな木々」とは神殿を指す。彼らは、神殿が潰えたと嘆く
 - (4) 「ヨルダンの茂みが荒らされる」とは、エルサレムとその神殿が紀元70年に破壊されたときに実際に起きた。ローマ軍は、ユダヤ軍の食料補給を断つためにヨルダン川沿いの緑豊かな地域(ヨルダンの谷)を徹底的に荒廃させ、不毛の地とした。
 - (5) そのことは、エレ12:5、49:19、50:44にも預言されていた
4. 国土荒廃の根本的原因
 - (1) ゼカリヤ11章は、約束の地における国土の荒廃がなぜ起きるのか、その二つの原因を預言する
 - (2) そのふたつの原因とは、イスラエルの指導者たちが、第一に「真の羊飼」を拒否すること、第二に「偽の羊飼」を受け入れること

真の羊飼いが拒否されることの預言 11:4~14

1. 預言者ゼカリヤは、羊飼いを演じるように命じられる 4~6 節
 - (1) 4 節から 6 節で、預言者ゼカリヤはある役割を演じるように命じられる
 - (2) それを通して人々へのメッセージを表すため
 - (3) ゼカリヤに与えられた役割は、羊の群れを飼う羊飼い
 - ① 羊飼い=メシア
 - ② 羊の群れ=イスラエル民族
 - (4) 羊の群れは、オーナーにほふられる 5 節
 - ① 5 節「これを買った者」とは、羊の群れのオーナー
 - ② ゼカリヤの時代にはイスラエル民族のオーナー、すなわち支配者はペルシヤであるが、初臨のメシアのときには、ローマ
 - ③ イスラエルは、紀元 70 年と 135 年にローマによって滅ぼされる
 - (5) 「その牧者たち」とは、イスラエル民族の牧者たち=指導者たち
 - ① 彼らは、イスラエルの民が攻撃されても、「これを惜しまない」と預言されている。羊の群れ=イスラエルの民は、指導者たちから捨てられる
 - ② 6 節にいくと、さらに神からも捨てられる
 - (6) 神も、この地の住民を惜しまない 6 節
 - ① 6 節には、神もイスラエルの民を惜しまないとある。
 - ② 神は、「人をそれぞれ」、イスラエルの民で対象となる人はひとりも漏らさず、「王の手に渡す」、王の支配下に追いやる
 - ③ イエスの公生涯のときに、イスラエルには「王」は存在しない。しかし、ピラトの裁判のときに、ピラトがイエスを指して「さあ、ここにあなたがたの王が立っている」と告げると、パリサイ人たちは、イエスを拒否して、こう言った。「私たちには、カエサル以外に王はない」(ヨハネ 19:15)
 - ④ メシアを王として受け入れるかわりに、彼らはローマ皇帝を王として認めた。このローマ皇帝が、ゼカリヤ 11:6 で登場する「王」
 - ⑤ イスラエルの民がローマ軍に引き渡されたのは、神の裁き
 - ⑥ 紀元 70 年、ローマ軍との戦いにおいて、ユダヤ人の死者は 110 万人、奴隷にされたのは 9 万 7 千人を数えた
2. 預言者ゼカリヤが、羊飼いの役割を演じる 7~8 節
 - (1) 7 節で、彼は、「ほふられるべき羊の群れ」を飼う
 - ① この羊の群れは、イスラエルの民全体を指す
 - ② そして、同じく 7 節に、その役割は「羊の商人たちのために」とある
 - ③ この箇所へのヘブル語は、直訳すると「羊の悩むものたちのために」となる。「悩む」は、「貧しい」とか「あわれな」という意味でもある

- ④ これとよく似た表現で、預言者が使う慣用句がある。「悩む者たち」、「貧しい者たち」、「苦しめられている者たち」、「助けを必要とする者たち」といったことば。それらは、イスラエルの中の少数の真の信仰者を指す
 - 悩む者・・・Ⅱサム 22 : 28、イザヤ 49 : 13
 - 貧しく助けを必要とする者・・・ゼパニヤ 3 : 12
 - ⑤ イスラエルは、その歴史の中で、ことあるごとに民族全体としては神に対して反抗的であり不正であったが、いつも少数の信仰者が残されていた
 - ⑥ 彼らは、「レムナント（イスラエルの残れる者）」と呼ばれる（イザヤ 10 : 20）
- (2) 初臨のメシアの使命とレムナントの関係
- ① メシアの使命は、イスラエル全体に向けられたものであると同時に、イスラエルの中の信仰あるレムナントに特別に向けられたものでもある
 - ② マタイ 9 : 35～36
 - マタイ 9 : 35 は、イスラエル全体に対するイエスの働き
 - 9 : 36、「羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れている群衆」というのは、預言者の慣用句で言えば、「貧しく助けを必要とする者」、すなわち、レムナントである
- (3) 二本の杖を手にする
- ① ゼカリヤは、羊飼いの役割のために、二本の杖を使う
 - ② ひとつは、「慈愛」という名の杖
 - ③ もうひとつは、「結合」という名の杖
 - ④ 慈愛という名の杖は、群れを守るため。結合という名の杖は、群れをひとつにまとめるため
- (4) 三人の羊飼いの抵抗に会う
- ① 8節で、ゼカリヤは、三人の羊飼いの抵抗を受ける
 - ② イエスの公生涯の文脈に照らすと、この三人の羊飼いは、パリサイ人、サドカイ人、律法学者を指している
 - ③ 彼らは、メシア初臨の時期におけるユダヤ人指導層を構成する主要なグループ
 - ④ イエスの宣教の結果のひとつは、この3つのグループの没落
 - ⑤ 彼らが没落していく原因は、8節に書かれているように、『お互いに、がまんができない』という両者双方の反感
 - ⑥ イエスの側からの反感は、マタイ 23 : 1～37 に表れている。イエスは、ここで宗教的指導者（パリサイ人と律法学者）に対してきびしく非難している
 - ⑦ 他方、指導者たちの側からの反感は、彼らがイエス処刑を計画する場面や、イスカリオテのユダを買収してイエスを裏切らせようとする場面などに、表れている

3. 預言者ゼカリヤは、群れを飼うことをやめる 9～11節

(1) 9節では、一転して、群れを飼うのは、もうやめた、となる

- ① イエスの公生涯の中では、マタイ 12:22～45 の箇所当たる
- ② ここに書かれているベルゼブル論争は、イエスの公生涯の中で重要な転機
- ③ 悪魔に憑かれているとして、イエスをメシアでないと拒否した事件
- ④ この事件の前と後では、いくつかの際立った違いが見られる（後記）

(2) 許されない罪

- ① イエスを悪魔憑きと誹謗することは、「許されない罪」
- ② この事件をもって、紀元 70 年の裁きは避けられないものとなった
- ③ 注意しなければならないのは、この許されない罪とそれからつながる裁きは、当時の「この世代」にのみ関係するということ
- ④ 「この世代」というのは、ユダヤ人の当時の世代のみについて指している（マタイ 12:39、41、42、45；23:36）
- ⑤ 許されない罪が犯されたことをもって、イエスは羊の群れ全体を養うことはやめて、イスラエル民族の中の個々人のみを扱うようになった（後記参照）

(3) 10節 杖を折る

- ① 10節で、ゼカリヤは、羊を飼うことをやめると共に、「慈愛」という名をつけた杖を取って、これを折る
- ② これは、神がイスラエルを守ることをやめて、紀元 70 年の裁きが避けられないものとなったことを意味する。福音書では、ルカ 19:41～44 と 21:24 に、その預言の成就が見られる
- ③ 「すべての民と結んだ私の契約を破る」、「民」は複数形の peoples、異邦人の諸民族を意味する。イスラエルは神の守りを失い、異邦人の諸民族からの攻撃にさらされることになる。紀元 70 年、多国籍軍であるローマ軍による攻撃でそれは現実となった。

(4) 11節 そのとき、レムナントは神の裁きが民族に下ることを悟る

- ① 11節で、「羊の群れの中の悩める者」、すなわち信仰あるレムナントは、慈愛の杖が折られたこと、その杖は神のことばであったこと、そしてその杖が折られた結果何が起るかを理解する
- ② イエスの公生涯の間、ユダヤ人の信者たち（弟子たち）は、次のことをよく理解した。
 - 裁きが来る
 - その裁きは主の御手から来るものであり、避けることはできない
- ③ ルカ 21:20～24 で、イエスは彼らに、エルサレムが崩壊する 때가来たら、その時はエルサレムから逃げるように指示した
- ④ 紀元 66 年、エルサレムで暴動勃発。ローマ軍（シリア総督指揮下の軍団）が

エルサレムを攻撃。そのとき、エルサレムの中にいた信者たちには、裁きの時が来たこと、そして自分たちはこの戦闘に加わるのではなく、山に逃げるべきことが、すぐにわかった

- ⑤ ローマ軍はエルサレムを攻めきれずに一時撤退。ユダヤ人信者は、ヨルダン川東側のペラへ全員が避難。
- ⑥ 紀元67年5月ローマ軍3個軍団を中核にした多国籍軍6万の軍勢がガリラヤ制圧。海岸地域、サマリヤとヨルダン川東岸、と軍を進めて、68年エルサレムを包囲。
- ⑦ 皇帝ネロの死、ローマ軍は一方向的に停戦。攻囲を解いてエジプトに軍を引く。
- ⑧ 1年半後、70年春、ローマ軍4個軍団を中核にした多国籍軍がエルサレムを再び攻囲。5か月の激戦の末、8月10日に神殿炎上、9月8日に市内での抵抗は下火になり、9月26日にすべての抵抗が終わる
- ⑨ 結果として、ユダヤ人信者は、ひとりも死なず、ひとりも奴隷にならなかった。

ベルゼブル論争の前と後での変化

1. メシア性の宣言
 - (1) 事件前は、イエスは、公に自分をメシアであると宣言
 - (2) 事件後は、イエスはもうそのような主張はしないばかりか、弟子たちや癒しを与えた人たちにもイエスのメシア性を公言しないように口止めした
2. しるし
 - (1) 事件前は、イエスは、公然と、多くのしるしや奇跡を行って見せた
 - (2) 事件後は、イエスは、「ヨナのしるし」以外、しるしを行わなくなる
3. いやし
 - (1) 事件前は、イエスは、ご自身のもとに来る人をすべて癒した。そして、それが、メシア性の証明ともなっていた。
 - (2) 事件後は、もしイエスをメシアとして認め、それに基づいて癒しを求めて来る人がいると、イエスはその人を癒すことを拒んだ。そうではなくて、その人が個人的な必要を訴え、個人的な信仰をもって近づいたときは、いやしを与えた。
4. 教え方
 - (1) 事件前は、イエスは人々に公然とそして明瞭に教えた。教えるということは、羊の群れを養うこと。こういう教え方は、山上の垂訓にその例が見られる
 - (2) 事件後は、スパッと教え方が変わる。たとえ話が多用され、その意味するところは弟子にはあとで説明されるが、聴衆にはわかったような、わからないような、結果的に群衆には真理が隠された。